

# ニューヨーク補習授業校

平成二十七年(二〇一五)年度

## 卒業式特集号

2016年4月2日発行  
56 Harrison Street  
204 New Rochelle  
NY 10801

### 平成二十七年(二〇一五)年度卒業証書授与式

平成二十八年三月十三日(日)午前十時十五分から、ニューヨーク補習授業校の卒業証書授与式が、アルバート・レオナルド・ミドルスクールで行われました。

式は厳粛な雰囲気の中で行われ、例年以上に素晴らしい卒業式となりました。



卒業生の皆さんは、緊張した中にも晴れやかで自信に満ちた表情で式に臨み、初等部七十四名、中等部三十一名、高等部十名、計百十五名が巣立っていました。

ここに紹介する「送辞」「答辞」には、代表者の児童・生徒だけでなく、補習授業校に学ぶすべての子どもたちの、これまでに経験してきた様々な体験や苦勞、そして深い思いが凝縮されています。

楽しかったこと、苦しかったこと、そして悲しかったことなど、列席したすべての人が、その一言一言に共感し、時には涙をさそわれる場面もあり、会場は感動に包み込まれました。

卒業式今回の補習校だよりを通して、補習授業校の教育の原点と魅力をあらためて考えるきっかけとしていただければ幸いです。

LI校初等部 6年1組	LI校初等部 6年1組	LI校中等部 3年	LI校高等部 2年	W校初等部 6年1組	W校初等部 6年2組	W校初等部 6年3組	W校中等部 3年	W校高等部 2年
ブシェ フランシス	サンタクル 菜々美	アナピアン マックスウェル	畑崎 理紗	ペリリー デニス	コーネル 未亜	荒木 春慧	荒木 信太郎	グレイ ホープ
江川 怜	猿見田 美星	新井 美彩	モンゴメリー 花子	五木田 海人	日比野 匠	ダイヤモンド 廉	ボールダウイン 吉田 サラ	加藤 千晶
フィオレティ 海音	高木 蓮奈	フォイ 恵利果	岡田 梓	林 光希	倉林 樹花	グレイ ダニエル	デ化ッド キャロリン 美雨	前田 花帆
藤森 紫乙奈	高橋 杏	古庄 アカネ		今西 優豪	宮崎 嘉縫	川島 武継	福島 大朗	松山 翔太郎
福田 つむぎ	寺尾 さしゃ	平形 将都		加賀 大裕	森藤 玲応	松下 愛理	細野 露可	三井 寛子
フシロ タラ	豊田 夏稀	ハッテンバック よな		菊池 クリステン 奈緒美	中本 諒平	マクラヘニイ 恵	面 みあ	中田 泰寛
廣田 英祐	上野 瀬李奈	稲留 清香		前田 明日香	中村 真里菜	宮西 あかね	松野 恵美里	清水 孝朗
河合 琉那	吉川 杏奈	石田 丈士		宮崎 真弥	野口 花菜	中田 もも	宮部 航一	
保坂 ウェンディ		木田 マーク		中島 一葉	小野 智名美	中村 玲	宮崎 竜太郎	
ハッテンバック 光蓮		松井 こころ		パレンテ 凜映名	パルミエリ リーアム	中村 凜	長濱 理紗	
石原 理生		中村 夢乃		柴田 紗良	シュワルツ 世音観	那須 咲代	押川 春香	
北村 凜		小倉 映海		武神 亜弥	白倉 龍馬	末廣 隆介	清水 美緒	
小林 瑛菜		ソーリアル 明菜		田内 桃	田畑 海登	武田 悠里	武神 美奈	
小濱 りづ		サリハン 花理		藤堂 直緒子	立川 旺佑	竹内 琴菜	都甲 健太	
牧野 駿		高木 莉佳		富田 笑香	竹淵 はな	田中 泰来		
松浦 みず		高橋 悠真		上田 伸明	玉村 理紗	吉川 遼		
宮内 清		吉藤 杏菜			山野 愛実			

春がもうそこに顔をのぞかせている。この季節、お別れのときがどうとうやってきました。

今、先輩方は、補習校での学校生活をどう振り返っているでしょう。色々な人と出会い、貴重な体験をされた人も多いと思います。私たち後輩をどんなときでもサポートし、お手本となってくださった先輩方の存在は、私たちにかげがえのないものを残してくださいました。

毎年行なわれる運動会は、数ある補習校のイベントの中でも大きなものだと思います。この日が一番先輩方と交流が持てた気がします。応援団の計画をしているとき、だれも隅々に残さずにみんなの意見を聞いてくれた先輩方は、リーダーシップを発揮しながらも、私たち後輩の意見をきちんと聞いてくださいました。私たち後輩ももっと発言するようになり、怖がらずに先輩方と気軽に話せるようになりました。

もう一つ運動会で感じたことは先輩方の優しさでした。「大丈夫。がんばって！」と後輩たちをばげまし、徒競走で一位でなくても喜んでハイタッチしてくださり、転んだ後輩がいると必ず助けてくださいました。そういう先輩方の優しさに初めて触れたときには、胸が熱くなりました。

球技大会も運動会と同じくらい先輩方と関わりをもてました。中学一年生から高校一年生を混ぜて、チームを作るので、違う学年の生徒との関係が強まり、先輩・後輩の絆が深まったと思います。

最後にバザー。目的は色々なセールをして、集まったお金を日本の震災で被害を受けた場所へ送ることでした。しかし、バザーでは一緒に協力し合って物を売るだけではなく、現地の学校生活のことを聞いたり、補習校以外の色々な経験のことを話したりと、先輩方のまた別の顔を見ることができました。先輩方は今年から大学生として生活を始めるので、大学のことや将来の夢などを聞くことができました。日常のちょっとしたこと、地下鉄や美味しいレストランのことなど：本当にたわいもないことばかりでしたが、それで先輩方とより仲良くれました。

今こうやって振り返ってみると、先輩方は常に私たちの目標であったことが明らかです。心の支えでもありました。毎日忙しい中、補習校に通い続けて、努

力してここまで来られた先輩方を、私達はずっと見習い続けてきました。

先輩方、厳しい社会へ出て行く前の胸中は何のようでしょうか？

これから人生を歩んで行く中、で数えきれないくらいのチャレンジや壁にぶつかれることもあると思います。そういうときが来たらどうか補習校を思い出して下さい。

私は覚えています。毎週、皆の顔を届けてくれた先輩、私たち後輩が困ったときにはいつも助けてくれた先輩、そんな先輩にはどんな嵐でも乗り越える事ができる、きっと特別な勇氣と智慧が備わっているはずですよ。その誇りと自信は、将来どんな大きな壁にぶつかっても、その壁を壊す武器となるはずですよ。

私たちは先輩方に心から感謝しています。先輩方が残してくださいましたかけがえのないもの、それは「後輩を思いやる優しさ」です。私たちは、この優しさを受け継いでゆくことを約束します。

最後になりましたが、「先輩方、ご卒業おめでとうございます。補習校在校生一同、心よりお喜び申し上げます。」

## 答辞(一)

1ー校初等部卒業生代表 フィオレティ 海音

六年前の四月、僕はニューヨーク補習校の一年生に入学しました。今でもその日の事をはっきりと覚えています。新しいランドセル、新しい筆箱、気持ちも新たにワクワクしながら補習校の門をくぐりました。この時はまだ、補習校と現地の両立の難しさを知りませんでした。

三年生になった時、初めて補習校と現地の両立の難しさを感じました。なぜなら、この年に野球のチームに入団したからです。補習校と現地校と野球、この三つの事を両立させなければならなくなりました。母と話し合い、どうすれば全てを両立できるか、次のような事を考えました。

まず、一週間のスケジュールを組みました。「野球の試合がある週は、空いている時間を利用して補習校の宿題を済ませることができるよう、スケジュールを考える。そして、全ての宿題は木曜日までに終わらせる。また、漢字テストの勉強は、五分でも空いている時間を使い、三日以上はする。」という計画です。簡単なようで、なかなか計画通りにはいかないものです。三年生の時は、母に手伝

ってもらい、一週間のスケジュールを組みました。まだまだ一人ではスケジュールの管理はできませんでした。しかし、四年生になると、少しずつ空いている時間を見つけては、母に言われる前に、自分から進んで宿題を済ませることが出来るようになってきました。五年生になると一人でスケジュールを組むことが出来るようになり、自分が両立できる、という自信にもつながりました。

今日まで補習校を続けてこられたのは、僕一人の努力だけではありません。二人三脚であきらめずに僕と一緒に頑張ってくれた母、静かに後ろから見守ってくれた父、楽しく授業をしてくれた先生方、補習校で出会った友達、多くの人々のおかげで今日という日を迎えることができました。心から感謝しています。

補習校でのたくさんさんの思い出を胸に、これからも日本語、日本の文化を学び続けていきたいと思えます。ありがとうございます。

### 答辞(二)

W校初等部卒業生代表 宮崎 嘉綾

私は、幼児部から補習校に入り、あっという間に六年生になりました。

「かぬいちゃんは英語も日本語も話せていいわね。」

と日本に帰ると、友達や親せきに言われます。けれども、補習校に通っていないければ、今はちょっとした日本語が分かる程度だったと思います。

この七年間、補習校でいろいろな思い出ができました。週に一回の補習校ですが、毎年たくさんの方達を作り、今では家に行き遊ぶような親友もできました。また、現地校ではやらない運動会もできました。運動会では、クラス全員で力を合わせて優勝を目指しました。

一方、つらいこともありました。毎週金曜日は、土曜日に提出する宿題をあせてやりました。後回しにしておくのは良くないと自分でも分かっています。でも、好きな事をやりたいし、だれかに「宿題をやりなさい。」と言われると、もっとやりたくなくなります。そんな自分がなまけなくなる時もありました。ただ、やればいい。たったそれだけのことに、その「やる」ということが大変なのです。

でも、何年も続けているうちに、補習校の宿題をすることが生活の一部になりました。補習校に通うことで身についた習慣を、これからも続けていきたい

す。

私の母は、将来、日本の大学に行くのか、それともアメリカの大学に行くのか、今のうちから考えた方が良くと言っています。私は六年生だし、大学へ行くのはまだまだ先のことだと思っていました。けれども、初等部の卒業が近くなり、今の中途半端な日本語と英語で、これから本当に大じょうぶなのか不安になってきました。こんな気持ちのままではいけないと、中等部へ進学して、もっと日本語をがんばる決心をしました。中等部では、宿題も多くなり勉強も難しくなり大変になるかもしれませんが、中等部でも途中でやめないで、最後までがんばりたいです。

お世話になった先生方、仲良くしてくれたクラスメイト、お父さんお母さん、本当にありがとうございます。

初等部での貴重な経験を忘れずに、中等部でも新しいことにどんどんチャレンジしたいと思えます。こんな私を、これからも温かく見守ってください。

本当にありがとうございます。

### 答辞(三)

L校中等部卒業生代表 高橋 悠真

冬の寒さも和らぎ始め、少しずつ春が感じられる気候になって参りました。

今日この良き日、私たち卒業生のためにこのように晴れやかな卒業式を挙げていただき、心より感謝いたします。この度はご多忙の中を、ご出席下さいました御来賓の皆様、校長先生はじめ諸先生方、並びに関係者の皆様に、卒業生一同、心より感謝致します。

思い起こせば、この3年間の学校生活で、私達は学問のみならず、多くの貴重なことを身につけることができました。それは人として生きて行く上で非常に大切な重要なことでもあります。こちらの学校に作っていただいた環境は、ここでしか味わうことのできないものなのでしょう。日本にある学校とは少し違い、多種多様な文化の混ざっているニューヨークにあるこちらの学校では普段のアメリカ生活の中では体験できない様々なことを学ぶことができました。今振り返ってみれば、四月中学一年生になった頃、先輩後輩という関係の意識が弱く、先生からご注意を受け、年長者を敬うということを知り、先輩方への接し方を学ぶことができました。また、小学生の時とは4時間授業であったためか、中学生になり

6時間変わった時、時間がなかなか進んでくれず、長く、億劫に感じられました。しかしクラスの友達や先輩方と毎週を過ごしていくうちに、2時間授業が増えたということすっかり忘れて楽しく感じられるようになっていたのです。小学生の時はただ、面白く感じていた学校行事も中学生になり、他にも様々なものが見えてきました。例えば、運動会の日には早朝に家を出て、半分眠った状態で運動会の準備をしなければならぬという辛さや煩わしさがあったり、中学生になり上級生として下級生の子たちを先頭にたって引張っていかねばならない事。また餅つき大会では日本の伝統文化を体験でき、球技大会ではチームワークの大切さを学びました。そして私たちはこれらの行事を通して、アメリカに居ながら日本の文化に触れ、体験することができました。中学に入ってから行うようになったスピーチ大会では先輩方や皆さんの洗練されたスピーチに毎回感動いたしました。最初は文章の書き方が分からず、戸惑い

ましたが、先生方のご指導のおかげでだんだん分かるようになっていきました。私はこの行事から、周りの人に自分の意見を分かりやすく伝えることの大切さも学びました。これらの経験は、きっと私達の一生の糧となり、自信となることでしょう。

そして僕達が目標に向かって前進することができたのは先生方や保護者、両親の励ましがあったからこそです。先生方は学校生活において私たちにとって一番身近な存在でした。でも、先生たちを困らせてしまうこともたくさんあったと思います。授業を通じて熱心にまた辛抱強く私たちを導いて下さいました。先生方のご指導に本当に感謝しています。在校生の皆さん、学校の行事を通して、皆さんと一緒に中学生生活を過ごすことができたことに感謝しています。また、私たちを支えてくれたる家族にも感謝したいと思います。いつも心配させて困らせてしまった三年間でしたが、ここまで育ててくれたことに本当に感謝しています。

私達、中学三年生は今日で卒業します。こちらの学校の精神は、後輩たちに受け継がれていき、今後、ますます発展していくことと思います。四月から、高校生になります。更に高い目標と大きな夢を持ち、邁進していくことをここに誓います。

最後になりましたが、ご来賓の皆様方、校長先生をはじめ、諸先生方のご健勝とさらなる発展を祈念し、卒業生の答辞といたします。

ありがとうございました。

カーテンの間隙から差す自然光、鳥のさえずり、淹れ始めたコーヒーの香りで目覚める素敵な週末の朝、なんてものはうちにはありません。なかなか起きてこない弟を怒鳴る母、怒鳴られて不機嫌な弟と車に乗り込み補習校に向かうのが私達の土曜の朝です。

十年前、補習校に入った頃の記憶は、はっきりしないのですが、母の希望だったことは間違いありません。小学校も高学年になり、フィールドホッケーやラクロスなどのスポーツを始めてからは補習校に行くのが大変になってきました。補習校とスポーツの両立は難しいと思ったので中学への進学は諦め、退学届を出しました。

すると、そのことを知った幼児部からの友人たちが「一緒に中学も行くー」と熱心に進学を勧めてくれたのです。

私達の学年は男女の区別無く仲が良く、中学では珍しい一学年がニクラスになるほどでした。みんなと別れがたい気持ちもありスポーツと補習校の両立を出来る限り頑張ってみよう！と進学することにしました。

中学校に入り初めてのみの市ではパンケーキにフルーツやホイップクリームで盛り付けたパフェを販売しました。商品自体は手間やコストが掛かり過ぎていましたし、店の場所としては最悪な一番奥、宣伝も足りなかったこともあり、売り上げ目標の五百ドルには五ドル足りない悔しい結果になってしまいました。

この苦い経験から多くのことを学んだ私達は反省点を踏まえ、次の年には低コストで出来るお団子とわらび餅を商品にしました。味もみたらし、餡子、磯辺、きな粉とバラエティに富ませ何回も買ってもらえる様に工夫しました。その甲斐あって、高等部の鉄板人気商品クレープに次ぐ第二位の売り上げになりました。達成感を味わうことが出来ました。

このように初等部とは違う自主的な活動をするうちに、友達は仲間という言葉がびったりな存在になっていきました。そんな仲間と過ごす補習校は、私が本当の自分でいられる数少ない場所の一つです。アメリカで日本食を食べ、親から「Geat! Geat!」の褒め言葉はあまりもらわなくても大丈夫に育った仲間達とは、なんの説明をしなくても分かり合えるからです。

勉強面では、歴史や社会を学び始めてから、物事を日本人目線とアメリカ人

目線の両方から見られていた自分に気がきました。塾のように勉強だけしたり、言語としてのみ日本語を習ったりしても「アメリカ人ならこう思う、日本人ならこう感じる」という感覚は育たなかったと思います。

そして、いよいよ高等部への進学をどうするか決めなければならぬ時期になり、両親と話し合いました。土曜日に補習校に行くということは、家族で過ごす時間を削るということでもあるので、私の気持ちだけでは決められません。父と母は「大学進学も近付き、これからは今まで以上に現地校の勉強、スポーツ、ボランティア、吹奏楽に時間が割かれるので補習校は中学で卒業がいいかもしれないね。」とアドバイスをくれました。実際のところは両親も年をとってきて、土曜日は家でゆっくりしたくなつたのかもしれないかもしれません。確かにこれからの二年間は今までよりもっと大変になると思います。

でも、一旦は諦めた中学で多くのことを学んだ私は、高校の二年間で更に多くのことを学べると確信しています。両親には「高等部までやり遂げたい」という気持ちを伝え進学させてくれるよう、お願いしました。幼初等部へは母に、中等部へは友人たちの勧めで進学した私ですが、高校への進学はこうして自分の強い意志で決めました。

最後になりましたが、いつも親身になってくださる先生方、勉強以外のことは乗りが抜群な仲間達、ここまでこられたのはみなさんのお陰です。ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。お父さん、あと少し一日何往復もの送り迎えを、お母さん、お弁当作りをお願いします。

答辞 (ノ)

ノー校高等部卒業生代表 モンゴメリー 花子

厳しい冬に終わりを告げ、春を感じるこの日に、私達卒業生の為に、素晴らしい卒業式を挙げて頂きありがとうございます。又、ご出席下さいました、ご来賓の皆様、校長先生を始め、諸先生方、関係者の皆様、並びに保護者の皆様に、卒業生一同、心からお礼申し上げます。

思い起こせば十四年前の四月半ば、幼児部年中組を途中入学した私はとても恥ずかしがり屋で、母の後ろに隠れて、クラスの様子を伺っていたのが昨日の事のようにです。幼児部では、運動会でのお遊戯、秋祭りゲーム、ハローウィーンでまとったセーラーモーンの衣装、サンタクロースがクラスに来たクリスマス、お

母さん達お手製の人形の劇など楽しい思い出いっぱいです。

それが、小学校に上がるとそれまで楽しかった補習校が、本格的に勉強の場へと変わり、学年が上がるにつれ宿題が増え、毎週の金曜日が憂鬱になってきました。現地校のお友達との違いは明らかで、土曜日は現地校の友達とはゆっくり休み。私は勉強づけ。現地校でミドルスクールになると、更に宿題の量も増え、私の自由時間は奪われていきました。

それでも、私の両親は、日本語を私に学ばせる事を、天からの使命のように、頑として補習校を辞めさせてはくれません。私もよせばいいのに、勢いで中等部に上がり、勉強は予想以上に難しく、クラスについていけないか焦りを感じはじめます。気が付くと、クラスメートは理紗ちゃん一人。他のクラスメート達は、私の知らない未知の生活を謳歌する為、補習校を辞めて行きました。

「このままでいいの？」不安がよぎりました。もし補習校を辞めて、私の好きなダンスに集中したら、もしシアターグループの活動に専念できたら、もし単純に羽を伸ばせられたら、もし、もし、もし、

心の中で葛藤が生じる中、私達に日本語と日本文化の素晴らしさを、ある時は歌で、またある時は雑談から体感させて下さったのが、担任を受け持って下さった先生を始めとする補習校の先生方です。そして、日本語だけでなく日本をもっともっと知りたくなり、歌や映画、TV番組、本等を片っ端からあさり始めました。あんなに補習校に通うのが億劫で仕方無かったのに、絶対に欠席しなくなりました。いつしか、補習校はありのままの私を認めて受け入れ、羽を休められる居心地の良い場所へと変わっていました。

しかし、日が経つにつれ、「私はきちんとした日本語を学ぶには、遅すぎるかもしれない。」と新たな恐怖が私の頭をかすめ始めます。しかし：再び私は高等部へと進級しました。高等部へ入ってから、生徒会活動を通して先輩、後輩の上下関係、伝統を継承することの大切さ、クラスメイト以外との強い絆、いわば社会の縮図を学んだ気がします。なにより、私は一番シンプル且つ重要な事を学びました。それは、「日本人である」ということ、「自分が諦めなければ、学ぶことに遅い」という事は無い。」ということです。

理紗、あなたの存在が私に勇気をくれました。あなたがいたから私もここま

で来る事が出来た。これからもよろしく。梓、二年間の短い間の付き合いだけど、もっと前からの知り合いのように仲良くなれて、楽しかったよ。ありがとう。最後に、お父さん、お母さん、これまでの長い間、私を支えてくれてありがとう

う。

絵本を読み聞かせてくれた時、いつの間にか寝ていたお母さん。宿題に頭を抱えていると、テキストと勘違いして、解答を手渡してくれたお父さん。あれから私、いくらか成長しましたか？ 母の背後に隠れていた時のように、今も本当は怖いのです。この先いくつもの困難が待ち受けているだろうと思うと足がすくんで動けない時もあります。そんな時は、ほんの少し背中を押してください。これまでそうしてきてくれたように。

二年前のこの日、私は中等部卒業の答辞を読みました。その時、「鳥かごに通うのは、自分が立ち止まって動けないからではなく、時が来るまで力を蓄え毎週、毎週、成長し続けているから」といいました。今日、私達はその日を迎えました。より高く、より遠くへ、羽を大きく空一杯に広げて、今、私達は旅立ちます。皆さん、本当にありがとうございました。

### 答辞(Ⅱ)

W校高等部卒業生代表 前田 花帆

未来の自分へ、

あなたには今、ほっとする場所がありますか。一緒に笑いあえる人はいますか。十七歳の今の私にとっては、補習校がそのほっとする場所。一緒に笑いあえるのは高等部のクラスメート。そして、一番大事な質問。頼りにできる人はいますか。この大事な質問の答えは高二の仲間。補習校は私たちの大切な居場所だった。これからもきつと心の居場所であり続けてくれるはず。だから、補習校で過ごした十二年間を思い出す時、きつと今ここに立っている私の、自分自身の気持ちを感じ出すと思う。

卒業式のこの日のことを今まで何度も想像してきた時は、ものすごい達成感を感じるのだろうかと思っていた。けれど、今の私は、マラソンのゴールテープを切った人の気持ちではない。今の私は、この場所に「さよなら」とは言いたくない。ゴールラインを越えたくはないのだ。いつの間にか、補習校は私が大好きなところになっていた。補習校はずっと私の人生に存在していたもの。土曜日は毎週補習校に行くのがあたりまえだった。けれど、私の補習校に対しての気持ちはこの十二間で本当に変わった。

私の補習校での時間は幼児部から始まった。お母さん、お父さん、補習校という旅に送り出してきてくれてありがとう。今まで、いつでも私のために思ってくれてありがとう。

両親のサポートのおかげでたどり着いた小学校の卒業式。私は今と同じこの場所に立って、補習校という場所に「ありがとう。」という言葉告げた。今日の私も補習校に同じ言葉を伝えたい。けれど、今日はあの五年前の三月の日とは違う。私が違うから。そして、私の補習校に対しての思いが違うから。

中学時代。高校時代。自分がどういう人間であるのか、そしてこれからどんな人間になるのかを探す時期だ。少し寂しい時もある。少し孤独な時期もある。けれど私と高二のクラスメート、この七人には補習校という存在があった。補習校には、お互いの気持ちを分かち合える仲間がいた。どんな時でも、何も言わなくても誰かがわかっていてくれると信じていることができた。補習校には、支えてくれる先生もいた。先生方、本当に感謝しています。ありがとうございます。うるさい私たち七人がお世話になりました。

そして、私は補習校で自分のアイデンティティーを見つけた。私がアメリカに住んでいる日本人であるということに本当に気づけたのは補習校のおかげだった。

だから、未来の自分がどこで、誰といても、補習校で出会えた先生と友達のこととは忘れていないと信じている。私は今年の補習校を卒業する高等部二年生の七人の一人。高二ファミリーの一人。

体は小さいけれど、誰よりも食欲とエネルギーがある三井寛子。

いつも寝ているけれど、意外な読書家の松山翔太郎。

クラスのことをいつも考えているムードメーカーの加藤千晶。

いつもカメラ目線になってしまう、クレープ作りが上手な清水こうろう。

誰よりも日本語を学びたいという熱意が強い、「さすが」なグレー希望。

漢字が大の苦手だけれど、人のいいところを見つるのが上手な中田泰寛。

そして私、前田花帆。先生の寒い冗談、国語の授業での漢文、そして冬祭りのお菓子のスキャンダル。どんなことでも七人で一緒に乗り越えられた。だから困った時、悲しい時でもこの七人で過ごした時間を思い出して。補習校で過ごした時間を思い出して。自分にはこういう存在があったということがどんなに幸せか思い出して。

今日は補習校を去らなくてはいけない。一人一人次のステージへ向かうのだ。  
けれど一人ではない。この七人なら大丈夫。この思いを信じれば大丈夫。  
さあ、今だ。最初の一步はみんなで踏み出そう。  
行つてきます。